

論文

# フリーター「選択」と自尊感情・職業意識

——「高校生の生活と進路意識調査」から（3・最終）

内田龍史

## 要約

本稿は、二〇〇四～〇五年に行われた「高校生の生活と進路意識調査」から、高校卒業時における進路分化と、自尊感情・職業意識との関係を分析している。結果、「女子」「商業校」「進路多様校」生や、身のまわりに「不安定・ブルーカラー」層が多いと感じている層で、大人からの期待を感じていないなど自尊感情が低くなっており、心理的排除がフリーター析出要因のひとつとなっていることが示唆された。

## はじめに

子どもたちの出身家庭の社会階層の高さと、学力の高さに正の相関があることは周知の事実である（荻谷・志水編、二〇〇四）。個々人を見れば例外はあるものの、学力の高さが学歴の高さへ、学歴の高さが安定した仕事へ、（特に男性の場合）安定した仕事が結婚を可能とし、子ども

もに対して活用できる資源の多い家庭のもとでの子育てへとつながっていく。かくして出身階層が次世代に再生産されるといふ傾向は否定できない社会的事実であり、若年層を中心とした貧困（さしあたり貧困研究会、二〇〇八）や子どもの貧困（浅井・松本・湯沢編、二〇〇八）は大きな社会問題となりつつある。とはいえ、特に学校などの教育現場において、階層的な違いを生じさせている社会の変革を即座に求めることは困難である。

こうした教育現場からの介入が難しい出身家庭階層という要因それ自体は否定できないものの、それとは異なる子どもたちの学力形成への働きかけの可能性を見出したのが、池田寛らの研究である。池田らは、部落の子どもたちを含む学力・生活実態調査から、子どもたちの低学力と「自己概念」との関係について分析を行っている。一連の研究から明らかになったことは、学力の高さと自尊心の高さとのあいだに相関関係が見られるということであった（池田、二〇〇〇）。自尊心は他者との関係において育まれるものであることから、教師などを中心とした学校での取り組みによって働きかけられる可能性がある。こうして子どもたちの自尊心を高める取り組みが注目を集めることとなり、現在では、教育現場において「自尊心」を育むことは、「学力」形成を促すという側面においてもひとつの目標となっている。

本稿は、「高校生の生活と進路意識調査」（以下、「高校生調査」）の結果から、高校卒業時における進路分化を検討するシリーズの第三回目である。ここでは自尊心に着目し、進路分化や職業意識などとの関係について分析を行う。というのも、主に小・中学校で重視されている学力形成のみならず、高校生の進路分化・職業意識と自尊心との関連を把握しておくことは、現在推進さ

れているキャリア教育など、高校生に対する教育的働きかけを考えるうえでも重要な示唆が得られると思われるからである。用いるデータは、大阪府の公立高校一・二校の協力のもと、二〇〇四年二月から二〇〇五年一月にかけて各学校の高校三年生を対象とした「高校生調査」から得られたものである。有効回収数は一四〇九票であった。調査の詳細については、調査報告書（部落解放・人権研究所編、二〇〇六）を参照されたい。

なお、本稿は「高校生調査」に関する分析の最終回にあたる。進路分化と高校生の生活構造との関連については菅野（二〇〇八）、家庭の階層的背景との関連については妻木（二〇〇八）を、あわせてご覧いただきたい。

## 一 自尊心とその特徴

### 1 自尊心項目の要約

本調査で用いた自尊心に関する項目は、これまで池田寛らの研究グループによって行われてきた学力・生活実態調査にならったもの（表1）を用いている（例えば、鍋島ほか、二〇〇五）。ただし、ここで用いている項目は、小・中学生を対象にすることを前提として構成されてい

表1 自尊感情の主成分

	リーダーシップ	大人からの理解	大人からの期待	狭義の自尊感情	協調性
みんなの前でもはっきり自分の意見が出来るほうだ	0.761	0.042	-0.048	0.092	-0.126
リーダーになってみんなをひっぱっていくほうだ	0.742	0.022	0.087	-0.051	-0.047
他の子よりも多くのことを知っているほうだ	0.609	-0.058	0.103	-0.033	0.234
スポーツや音楽、絵を描くことに自信をもっている	0.485	0.078	0.143	-0.022	0.040
むずかしいことにおつかった時こそ、がんばるほうだ	0.470	0.109	0.129	0.197	0.250
保護者は私の気持ちをわかってきている	0.000	0.783	0.006	0.041	0.117
私はとてもしあわせだ	0.226	0.676	-0.043	0.205	0.016
先生は私の気持ちをわかってきている	-0.056	0.598	0.430	-0.057	-0.048
先生は私に期待をかけている	0.130	0.082	0.836	-0.006	0.012
保護者は私に大きな期待をかけている	0.124	0.015	0.727	-0.036	0.000
学校の勉強には自信をもっている	0.119	-0.013	0.519	0.181	0.295
*自分の性格でいやだと思ふところが多い	0.128	0.048	0.026	0.673	-0.043
*自分とはちがう人間になってしまいたい	0.203	0.328	-0.083	0.622	-0.152
*欲しい物があればがまんできないほうだ	0.181	-0.255	0.104	0.472	0.261
*家を出したいと思つたことが何度かある	-0.255	0.342	0.049	0.468	0.165
時間はさっしり守るほうだ	0.022	-0.006	0.089	0.136	0.707
まわりの人にあわせるのがうまいほうだ	0.176	0.196	0.003	-0.336	0.611
固有値	2.819	1.833	1.586	1.263	1.085
寄与率	16.6	10.8	9.3	7.4	6.4
累積寄与率	16.6	27.4	36.7	44.1	50.5

※因子抽出法：主成分分析（バリマックス法）

※そう思う = 3、どちらともいえない = 2、そう思わない = 1とした。（ただし、\*は逆転項目）

るため、本稿で総じて「自尊感情」と称される内実には、学校の先生との関係や勉強への自信など、学校文化への包摂/排除がかなりのウエイトを占めていることに注意する必要がある。とはいえ、対象者が高校生であることを考えれば、高校という学校文化への包摂感、自尊感情の形成に何らかの影響を与えうるとみなすことができるだろう。

ここでは一七の自尊感情項目を要約するために主成分分析を行った。結果は表1のとおりである。

第一主成分は、「みんなの前でもはっきり自分の意見が出来るほうだ」「リーダーになってみんなをひっぱっていくほうだ」「他の子よりも多くのことを知っているほうだ」などで主成分得点が高いことから、「リーダーシップ」と名づける。

第二主成分は、「保護者は私の気持ちをわかってきている」「私はとてもしあわせだ」「先生は私の気持ちをわかってきている」で主成分得点が高いことから、「大

表2 性別「大人からの期待」と「狭義の自尊感情」

	人数	大人からの期待	狭義の自尊感情
男子	430	0.300	0.229
女子	905	-0.145	-0.099
t 値		7.625**	5.668**

\*\* 相関係数は1%水準で有意、以下同。

人からの理解」と名づける。

第三主成分は、「先生は私に期待をかけている」「保護者は私に大きな期待をかけている」などで主成分得点が高いことから、「大人からの期待」と名づける。

第四主成分は、「自分の性格でいやだと思うところが多い」「自分とはちがう人間になってしまいたい」などで主成分得点が高いことから、「狭義の自尊感情」と名づける。

第五主成分は、「時間はきつちり守るほうだ」「まわりの人にあわせるのがうまいほうだ」で主成分得点が高いことから、「協調性」と名づける。

いずれも、その得点が高いほど、それぞれの特徴を強く持っているということである。

## 2 自尊感情の特徴

ここでは、主成分分析によって導

き出された五つの自尊感情主成分の特徴を把握する。

まず、男女差の検討を行うために、それぞれの主成分についてt検定を行った。性別との間に有意な差が見られたのは、「大人からの期待」と「狭義の自尊感情」だった(表2)。ともに「男子」の方が高く、「女子」の方が低い結果となっている。「男子」よりも「女子」の方が自尊感情の形成が妨げられている傾向は、これまでの他の研究においても確認されており(木村、二〇〇一・玉井、二〇〇一・内田、二〇〇五)、本調査においても同様の傾向が指摘できる。

本調査では、家庭の階層的背景を把握するために、「文化階層」を用いている。文化階層とは、主に教育社会学などで家庭の文化的環境を把握するために用いられている指標のことである。本調査では荻谷(二〇〇四)らにならない、「家の人はテレビでニュースを見る」「家の人が手づくりのお菓子をつくってくれる」「小さいときに、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらったことがある」の四段階「とてもあてはまる」～「あてはまらない」にそれぞれ四点～一点、「家にパソコンがある」の「はい」に四点、「いいえ」に一点を割り振ったうえ合計したものを文化階層得点とした。さらに、各グループの人数ができるだけ近

表3 文化階層別「リーダーシップ」と「大人からの理解」

性別	文化階層	人数	大人からの理解	リーダーシップ
男子	上位	143	0.251	0.126
	中位	165	-0.064	0.058
	下位	112	-0.255	-0.255
F 値			9.121**	5.111**
女子	上位	296	0.213	
	中位	328	0.090	
	下位	269	-0.283	
F 値			19.087**	

表4 学校タイプ別「大人からの理解」と「大人からの期待」と（女子）

	人数	大人からの理解	大人からの期待
準進学校	135	0.175	0.143
中間校	152	0.231	-0.072
商業校	360	-0.064	-0.280
進路多様校	258	-0.076	-0.148
F 値		4.986**	6.790**

くなるように「上位」「中位」「下位」にふりわけた。なお、高卒後の進路選択に至るそれ以前の傾向についても、文化階層の高い安定した家庭出身の子どもは小・中学校で高い成績をとり、難易度の高い高校に進学する、不安定な家庭出身の場合は対照的な進路を辿るという不平等の世代間再生産の現実が、本調査からも確認されている（菅野、二〇〇八・妻木、二〇〇八）。

文化階層との分散分析の結果、男子では「リーダーシップ」と「大人からの理解」、女子では「大人からの理解」とのあいだに有意差が見られた（表3）。性別を問わず共通する「大人からの理解」は、ともに上位ほど高く、下位ほど低くなっている。こうした傾向は、そもそも文化階層という概念が保護者との関係性を前提としていることを考えれば必然とも言える。いずれにせよ家庭の階層的背景が厳しい層ほど、大人から理解されていないと考える傾向にあると理解してよいだろう。

また、男子では「リーダーシップ」についても有意差が見られ、上位ほど高く、下位ほど低くなっており、上位層ほど「リーダーシップ」を発揮できるとする傾向が見られる。

続いて学校タイプ別の検討を行うために、分散分析を行った。結果、学校タイプ別には「男子」では有意な差

表5 進路分化別「大人からの理解」「大人からの期待」「協調性」

性別	進路分化	人数	大人からの理解	大人からの期待	協調性
男子	進学	323	/	/	0.045
	就職	69			-0.205
	フリーター	22			-0.412
	F 値				3.251**
女子	進学	510	0.101	0.010	0.017
	就職	237	-0.123	-0.249	0.198
	フリーター	138	-0.041	-0.461	-0.286
	F 値		4.300*	15.836**	10.892**

\* 相関係数は5%水準で有意、以下同。

が見られない。すなわち、「男子」は学校タイプ別には自尊心感情に違いが見られないのであり、このことはひとつの発見である。

他方、「女子」では「大人からの理解」と「大人からの期待」において、有意な差が見られた(表4)。「大人からの理解」は「中間校」「進学校」で高く、「商業校」「進路多様校」で低い。また、「大人からの期待」は、「進学校」で高く、「商業校」で最も低くなっている。この結果は、「女子」の「商業校」「進路多様校」に通う生徒たちが、相対的に大人

から理解・期待されているとは思っていない傾向を示している。

最後に、進路分化別(表5)を見ると、「男子」では「協調性」のみ有意差が見られ、女子では「大人からの理解」「大人からの期待」「協調性」で有意差が見られた。

「男子」では「進学」で最も「協調性」の平均値が高く、「フリーター」で最も平均値が低い。他方、「女子」においても「フリーター」で最も平均値が低いのは男子と同様であるが、最も高いのは「就職」層である。こうした傾向は、菅野(二〇〇八・七二七三)が指摘するように、実際に「就職」を選択する割合が高い「商業校」において、「実際の規則やそれに基づく生徒指導が徹底している」ことの反映ではないかと考えられる。ほか、「女子」では、「進学」で「大人からの理解」「大人からの期待」の平均値がともに最も高い傾向が見られ、「就職」で「大人からの理解」が、「フリーター」で「大人からの期待」が最も低くなっている。

以上の傾向を見ると、内田(二〇〇五a)が小・中学生を対象にした調査で指摘したように、高校生においても性別・文化階層において自尊心感情の違いが見られることが確認された。すなわち、「男子」よりも「女子」で「大人からの期待」を感じておらず、「狭義の自尊心」が

低くなっており、「文化階層上位」よりも「下位」層で「大人からの理解」がないと感じる傾向にあるなど、自尊心の形成が妨げられやすい層であることが確認できる。

また、学校タイプや進路分化においても「女子」に限れば自尊心の違いが見られる。「商業校」「進路多様校」や「フリーター」予定者で、特に「大人からの期待」を感じていないのである。言い換えれば、ここでは「大人からの期待」を受けていない「女子」の「商業校」「進路多様校」生徒たちが、最もフリーターとして析出されやすい可能性が指摘できるのであり、それは、小・中学生の段階から大人から期待されてこなかった傾向が蓄積された結果ではないかと推察される。

## 二 自尊心と身のまわりの人々

### 1 身のまわりの人々

自尊心は他者との関係において育まれるものだとすれば、身のまわりにどのような人々がいるのか、その認識の違いによっても異なると予測される。

本調査では、調査対象者が組み込まれているネットワーク構造を把握するために周囲にどのような人々がいるの

かをたずねており、「家族や親戚」「友人や先輩」「近所」のそれぞれについて「いる」か「いない」に○をつけてもらう形式を採用した。社会的に不利な立場に置かれた若者たちの周囲に多い、あるいは少ないと推測される人々が、調査対象者の周囲にどうかをたずねた一二の項目である。それぞれについて「いる」を一点とし、「いない」を○点として、足し算したものを身のまわりのモデル得点とした。続いて、彼/彼女らが組み込まれているネットワーク構造を把握するために、身のまわりのモデル得点について主成分分析を行った。結果、モデル得点は二つの「主成分」に要約できた（表6）。

第一主成分は、「建設現場で働く人など」「一〇代で結婚した人」「シングルマザー」「フリーター」などで主成分得点が高いことから、身のまわりにいる「不安定・ブルーカラー」層の多さであるとの解釈が可能である。そこで「不安定・ブルーカラー」得点と名づける。

第二主成分は、「大学生・大学を卒業した人」「サラリーマン」「専業主婦」「パートで働いている主婦」「医者・弁護士・学校の先生」などで主成分得点が高いことから、身のまわりにいる「安定・ホワイトカラー」層の多さであるとの解釈が可能である。そこで、「安定・ホワイトカラー」得点と名づける。

表6 身のまわりのモデル得点の主成分

	不安定・ブルーカラー	安定・ホワイトカラー
建設現場で働く人など	0.741	0.087
10代で結婚した人	0.725	0.143
シングルマザー	0.688	0.022
フリーター	0.542	0.310
経営者	0.480	0.387
工場現場で働く人	0.442	0.264
子育て正社員女性	0.393	0.379
大学生・大卒者	0.015	0.808
サラリーマン	0.090	0.753
専業主婦	0.236	0.615
パート主婦	0.339	0.547
医者・弁護士・学校の先生	0.157	0.464
固有値	2.626	2.6
寄与率	21.9	21.6
累積寄与率	21.9	43.5

※因子抽出法：主成分分析（バリマックス法）

これらはそれぞれ、得点が高いほど名づけられた性質の人々がまわりにたくさんいることを意味している。以下では、自尊心と身のまわりの人々との関係がどのようなものなのか、検討を行う。

## 2 自尊心と身のまわりのモデル得点

表7は、身のまわりのモデル得点と自尊心との相関係数を示している。性別を問わず共通しているのは、「リーダーシップ」との関係である。「不安定・ブルーカラー」、「安定・ホワイトカラー」いずれにおいても「リーダーシップ」との正の相関がある。また、「協調性」については有意な相関は見られない。

男子では、「安定・ホワイトカラー」得点の高さと、「大人からの理解」が正の相関、「狭義の自尊心」との間に負の相関が見られる。「安定・ホワイトカラー」が身のまわりに多い層は、大人が自分のことを理解してくれていると感じている反面、自分のことを否定的に見る傾向が見られるということである。しかし自分を否定的に見る傾向がなぜ引き起こされるのかについてはよくわからない。今後の検討課題のひとつとなる。

女子では、「不安定・ブルーカラー」得点の高さと、「大人からの期待」「狭義の自尊心」との間に負の相関が



表7 身のまわりのモデル得点と自尊感情との相関係数

性別		リーダー シップ	大人から の理解	大人から の期待	狭義の自尊 感情	協調性
男子 (N=393)	不安定・ブルー カラー	0.329**	0.065	-0.050	-0.069	-0.069
	安定・ホワイト カラー	0.204**	0.117*	0.045	-0.130*	0.046
女子 (N=793)	不安定・ブルー カラー	0.237**	-0.005	-0.094**	-0.148**	-0.056
	安定・ホワイト カラー	0.142**	-0.002	0.024	-0.008	0.041

見られる。不安定層が周囲に多い場合、大人からの期待を感じ取ることができず、自分のことを否定的に見る傾向が見られる。「女子」とっては周囲の「一〇代で結婚した人」や「シングルマザー」の存在は、自尊感情の形成につながるモデルとはなりえていないのかもしれない。このような傾向は、早婚を理想的だとしつつも、実際に早婚し、子どもを産み育てている女性に対する評価として「どうやろう…それなりに幸せ」といくらかの躊躇を含みつつ語る、社会的に不利な立場に置か

れたフリーター女性の姿（内田、二〇〇五b・七四）と重なり合うように思われる。

### 三 自尊感情と職業意識

前節で確認したように、自尊感情と進路分化・身のまわりのモデルには有意な関係が見られるが、自尊感情のありようと職業意識との関連はいかなるものなのか、検討を行いたい。

#### 1 職業意識の要約

職業に関する一四の項目を要約するために、主成分分析を行った。結果は表8のとおりである。

第一主成分は、「自分がやりたいことを探すためにフリーターになるのはよい」「働きぐちが減っているのでフリーターになるのはしかたがない」「フリーターになるのは本人が無気力なせいだ」などで主成分得点が高いことから、「フリーターへの親和性」と名づける。

第二主成分は、「できることなら仕事はしたくない」「あまりがんばって働かず、のんびり暮らしたい」などで主成分得点が高いことから、「仕事への忌避」と名づける。第三主成分は、「資格をたくさん持っていることは就

表8 職業意識の主成分

	フリーター への親和性	仕事への 忌避	資格・安定 志向	やりたい こと志向
自分がやりたいことを探すためにフリーターになるのはよい	0.789	-0.015	-0.012	0.200
働きぐちが減っているのでフリーターになるのはしかたがない	0.643	0.145	0.131	-0.073
フリーターになるのは本人が無気力なせいだ	-0.618	0.132	0.272	0.024
夢を実現するためにフリーターをしている人はカッコいい	0.587	0.069	-0.062	0.416
誰でもフリーターになるかもしれない	0.429	0.153	0.109	-0.179
正社員よりもフリーターのほうがよい	0.441	0.319	-0.300	0.005
できることなら仕事はしたくない	-0.017	0.822	0.056	0.113
あまりがんばって働かず、のんびり暮らしたい	0.027	0.788	0.104	0.169
高校での勉強は、仕事をするときには役に立たない	0.210	0.584	-0.068	-0.129
資格をたくさん持っていることは就職に有利になる	0.060	-0.086	0.659	0.224
安定した仕事につきたい	0.026	0.111	0.650	0.014
学校での成績で将来がかなり決まる	-0.090	-0.053	0.575	-0.051
いったん正社員として就職した会社は辞めない方がよい	-0.041	0.135	0.549	-0.308
自分にあわない仕事はしたくない	-0.005	0.141	0.022	0.813
固有値	2.548	1.888	1.417	1.037
寄与率	18.2	13.5	10.1	7.4
累積寄与率	18.2	31.7	41.8	49.2

因子抽出法：主成分分析 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

そう思う＝4、どちらかといえばそう思う＝3、どちらといえばそう思わない＝2、そう思わない＝1とした。

職に有利になる」「安定した仕事につきたい」などで主成分得点が高いことから、「資格・安定志向」と名づける。第四主成分は、「自分にあわない仕事はしたくない」で主成分得点が高いことから、「やりたいこと志向」と名づける。

いずれも、その得点が高いほど、それぞれの特徴を強く持っているということである。

## 2 自尊感情と職業意識との関係

では、これらの職業意識主成分と、自尊感情との関係はいかなるものか。表9は、自尊感情主成分と職業意識主成分の相関係数を示している。性別を問わず、「大人から

表9 自尊感情主成分と職業意識主成分の相関係数

	フリーター への親和性	仕事への忌避	資格・安定 志向	やりたいこと 志向	
男子	リーダーシップ	0.050	0.046	0.000	0.033
	大人からの理解	0.001	-0.214**	0.063	0.006
	大人からの期待	-0.053	-0.209**	0.118*	0.018
	狭義の自尊感情 協調性	-0.119*	-0.089	-0.147**	-0.028
		0.011	-0.092	0.113*	-0.075
女子	リーダーシップ	-0.031	-0.040	-0.080*	0.019
	大人からの理解	-0.014	-0.128**	0.047	0.083*
	大人からの期待	-0.191**	-0.165**	0.130**	-0.042
	狭義の自尊感情 協調性	-0.060	-0.179**	-0.161**	-0.043
		-0.001	-0.061	0.109**	-0.089**

の理解」「大人からの期待」と「仕事への忌避」が負の相関を示している。また、「大人からの期待」ならびに「協調性」と「資格・安定志向」が正の相関を示している。すなわち、大人からの理解や期待を感じていない層で「仕事への忌避」が強いということであり、大人からの働きかけが仕事への意欲を高める可能性が示唆されている。同様に、「大

人からの期待」を受けることや、「協調性」を育むことが、「資格・安定志向」を高める可能性もある。

奇妙なことではあるが、「狭義の自尊感情」と「資格・安定志向」との間にも負の相関がある。すなわち、「狭義の自尊感情」が低いほど、「資格・安定志向」が強いということである。あくまでも仮説にとどまるが、自己否定観を克服する手段として、資格や安定を志向しているのかもしれない。

男子のみで有意な差が見られたのは、「狭義の自尊感情」と「フリーターへの親和性」である。「狭義の自尊感情」の低さと「フリーターへの親和性」が結びついて

女子のみで有意な差が見られたのは、「大人からの期待」と「フリーターへの親和性」、「狭義の自尊感情」と「仕事への忌避」、「リーダーシップ」と「資格・安定志向」との関係である。「大人からの期待」の低さと「フリーターへの親和性」が、「狭義の自尊感情」の低さと「仕事への忌避」が結びついていて、さらに、「リーダーシップ」がないと感じている層ほど「資格・安定志向」である傾向が見られる。

ここで注目されるのは、「フリーターへの親和性」との関係が、男子と女子で異なることである。男子は「狭

表10 進路分化の規定要因

被説明変数 (vs フリーター)	進学		就職	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
男性 (vs 女性)	0.886 **	0.412	0.871 **	0.418
文化階層得点	0.072	1.074	-0.042	0.959
不安定・ブルーカラー	-0.728 **	0.483	-0.419 **	0.657
安定・ホワイトカラー	0.534 **	1.706	0.481 **	1.617
準進学校 (vs 進路多様校)	2.883 **	17.869	-0.861	0.423
中間校	1.064 **	2.899	-0.055	0.947
商業校	0.289	1.335	0.967 **	2.630
リーダーシップ	0.159	1.172	0.265 *	1.303
大人からの理解	0.084	1.088	0.004	1.004
大人からの期待	0.563 **	1.756	0.299 *	1.349
狭義の自尊感情	0.232	1.261	0.182	1.200
協調性	0.215	1.239	0.301 **	1.351
フリーターへの親和性	-0.481 **	0.618	-0.380 **	0.684
仕事への忌避	-0.027	0.973	-0.033	0.968
資格・安定志向	0.329 **	1.390	0.712 **	2.039
やりたいこと志向	-0.209	0.811	-0.429 **	0.651
切片	2.298 **		3.054 **	
カイ2乗	524.401		Cox と Snell の疑似決定係数	0.380
-2対数尤度	1413.118		Nagelkerke の疑似決定係数	0.458
N	1098			

義の自尊感情」の低さが「フリーターへの親和性」と結びついているが、女子は「仕事への忌避」と結びついているのである。つまり、男子は自己否定観が強いといえども働いている「フリーター」へとつながるのに対し、女子はそもそも仕事に対する忌避へとつながっていることが注目される。女子の自己否定が仕事への忌避へとつながる傾向は、不利な立場に置かれた女子により厳しい社会的排除をもたらす可能性を示唆している。

#### 四 進路分化との関係

ここで、自尊感情・身のまわりのモデル・職業意識が進路分化、特にフリーター選択に与える影響を整理するために、進路分化を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った。結果は表10のとおりである。

まず、進学とフリーター予定者との差異について見ると、性別では女子、身のまわりのモデルでは周囲に「不安定・ブルーカラー」層が多く「安定・ホワイトカラー」層が少ない、さらに「準進学校」や「中間校」と比較して「進路多様校」でフリーターを選択する傾向が見られる。また、自尊感情との関係では「大人からの期待」を感じていないものほど、職業意識との関係では「フリー

ターへの親和性」が高く、「資格・安定志向」でないものがフリーターを選択する傾向が見られる。

続いて就職とフリーター予定者との差異について、フリーター選択を規定する要因を見ると、性別・身のまわりのモデルは進学層との差異と同様であるが、学校タイプでは「商業校」と比較して「進路多様校」でフリーターを選択する傾向が見られる。自尊心との関係を見ると、「協調性」「リーダーシップ」がなく、「大人からの期待」を感じていないものほど、職業意識との関係では「フリーターへの親和性」や「やりたいこと志向」が高く、「資格・安定志向」でないものがフリーターを選択する傾向が見られる。「やりたいこと」とフリーターとの親和性は先行研究（久木元、二〇〇三）においても指摘されているが、本調査においてもそうした傾向が確認できると。

## 五 知見と考察

さいごに、今回の分析から明らかになったことをまとめておきたい。

(1) 自尊心の特徴として、おおむね「男子」よりも「女子」の方が「大人からの期待」を感じておらず、自

己否定観が強いことから、ジェンダーによってそのありようが異なることが確認された。さらに、「文化階層上位」よりも「下位」の方が「大人からの理解」が得られていないと感じる傾向が確認された。

(2) 「フリーター」予定者の自尊心の特徴としては、「男子」では協調性がない、「女子」では大人から期待されていない、協調性がないと感じていることがあげられる。

(3) 身のまわりのモデルとの関係では、身のまわりのモデルが多い層で「リーダーシップ」があると感じている。男子では「安定・ホワイトカラー」層が多いほど、「大人からの理解」を感じている反面、「狭義の自尊心」は低い。女子では、「不安定・ブルーカラー」層が多いほど「狭義の自尊心」が低く、「大人からの期待」も感じていない。

(4) 職業意識との関係では、「大人からの理解」や「大人からの期待」を感じていない層で「仕事への忌避」が強い。また、自己否定観が強いものほど「資格・安定志向」である傾向が見られる。さらに、男子では自己否定観が強いほど「フリーターへの親和性」が高くなるのに対し、女子では「仕事への忌避」が強くなる。

(5) 総じて、男子より女子が、周囲に「不安定・ブル

「カラー」層が多く、「安定・ホワイトカラー」層が少ない層が、「フリーターへの親和性」やりたいこと志向」が強く、「資格・安定志向」が弱い層が、「大人からの期待」を感じておらず「協調性」がないと感じている層が、フリーターになりやすいことが指摘できる。

以上の検討から、「自尊感情」は、少なからず職業意識・進路分化と結びついていることが確認された。とくに、自尊感情の観点から厳しい状況に置かれていると考えられる「女子」「商業校」「進路多様校」生や、「不安定・ブルーカラー」層の多いと感じている層には、自尊感情を高める取り組み、特に「大人からの期待」が感じられるような実践を高校現場において重点的に行う必要があるだろう。さらに、こうした傾向はおそらく小・中学生の段階から引き続いて見られるものであり、大人からの期待を感じ取ることのできない心理的に排除されている状態がフリーター析出要因のひとつとなっていることが指摘できよう。<sup>④</sup>これらの視点を重視した実践を行うことなしに、職業意識を高めるための教育を行っても、それは不十分な結果に終わるのではなからうか。

## 注

(1) 仕事と結婚との相関については、厚生労働省大臣官房統

計情報部編(二〇〇五)・堀編(二〇〇七)などを参照。  
 (2) 「商業校」は女子では四一・六%が「就職」となっており、他の学校タイプと比較して割合が高くなっている(「進学学校」〇・七%、「中間校」一四・三%、「進路多様校」二七・七%、いずれも女子)。

(3) 本項目は、「大阪フリーター調査」(部落解放・人権研究所編、二〇〇五)の知見に即して調査項目を作成した。これらネットワークと進路分化に関する分析については、内田(二〇〇六・二〇〇七)を参照。

(4) もちろん、フリーターの析出の最大の要因は、産業構造の転換によって正社員としての枠が減少したことにはかならない。しかし、性別や社会階層に関わらず、すべての子どもたちに高い自尊感情を育むための働きかけを行うことは、学校教育の大きな課題のひとつであろう。

## 文献

- 浅井春夫・松本伊智朗・湯沢直美編(二〇〇八)『子どもの貧困——子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店。  
 部落解放・人権研究所編(二〇〇六)『フリーター選択の構造と過程——高校生との生活と進路意識調査』報告書。  
 貧困研究会編(二〇〇八)『貧困研究』一号、明石書店。  
 堀有喜衣編(二〇〇七)『フリーターに滞留する若者たち』

勁草書房。

池田寛（二〇〇〇）「学力と自尊感情」『学力と自己概念』解  
放出版社、一三二―二〇六。

菅野正之（二〇〇八）「フリーター「選択」と学校生活——「高  
校生の生活と進路意識調査」から（一）」『部落解放研究』  
一八〇号、六四―七五。

木村涼子（二〇〇二）「大阪の子どものたちのジェンダー意識  
調査」『大阪の子どもたち——子どもの生活白書 二〇〇  
一年度版』大阪府人権・同和教育研究協議会、四三―五八。  
久木元真吾、二〇〇三「やりたいこと」という論理——フ  
リーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』第  
四八巻第二号、七三―八九。

厚生労働省大臣官房統計情報部（二〇〇五）『二一世紀成年  
者縦断調査（国民の生活に関する継続調査）（第二回平成  
一五年）』。

鍋島祥郎ほか（二〇〇五）『学校効果調査二〇〇四報告』大  
阪市立大学人権問題研究センター。

玉井真理子（二〇〇二）「ジェンダー意識と学習・進学意欲  
の関わり（上）」——T中学校における質問紙調査結果から「  
『部落解放研究』一四二号、六四―七四。

妻木進吾（二〇〇八）「フリーター「選択」と生育家族の階  
層的背景——「高校生の生活と進路意識調査」から（二）」『部

落解放研究』一八三号、六二―七三。

内田龍史（二〇〇五a）「進路意識・進路展望の現状と課題」  
『大阪の子どもたち——子どもの生活白書 二〇〇五年度  
版』大阪府人権教育研究協議会二一―三三。

内田龍史（二〇〇五b）「ジェンダー・就労・再生産——社  
会的に不利な立場に置かれたフリーター女性の語りから」  
『部落解放・人権研究所編』排除される若者たち——フリー  
ターと不平等の再生産』解放出版社、六六―八五。

内田龍史（二〇〇六）「進路分化とモデル・ジェンダー・ネ  
ットワーク」『部落解放・人権研究所編、前掲、一一七―一  
二四。

内田龍史（二〇〇七）「フリーター「選択」と社会的ネット  
ワーク——高校三年生に対する進路意識調査から」『理論  
と方法』四二号、一三九―一五三。

荻谷剛彦・志水宏吉編（二〇〇四）『学力の社会学——調査  
が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店。

荻谷剛彦（二〇〇四）『学力』の階層差は拡大したか』荻谷  
剛彦・志水宏吉編『学力の社会学——調査が示す学力の変  
化と学習の課題』岩波書店、一二七―一五一。